

* 特に断りがない限り、新改訳2017より使用



希望の光バプテスト教会

2022年 10月 9日 (日)

礼拝メッセージノート

「パウロの感謝と理由」

第一テサロニケ講解② テサロニケ人への手紙第一 1:2~10 小野寺 望

テサロニケ書第一のアウトライン

*パウロは思うままに書いているので厳密には分け難いが、一応以下の通りである。

I あいさつ (1:1)

II パウロとテサロニケ教会の関わり・個人的内容 (1:2~3:13)

A.感謝の言葉 (1:2~10)

B.テサロニケでのパウロの宣教 (2:1~16)

C.テサロニケ再訪の願い (2:17~3:13) ※教会の誕生・政党・確立とも言える。

III 教えと適用 (4:1~5:24)

A.クリスチャン生活 (4:1~12)

B.携拳 (4:13~18)

C.再臨への備え (5:1~11)

D.教会生活 (5:12~15)

E.清い生活 (5:16~24)

IV むすび (5:25~28)

【 テサロニケ人への手紙第一 】

- 2 私たちは、あなたがたのことを覚えて祈るとき、あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています。
- 3 私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。
- 4 神に愛されている兄弟たち。私たちは、あなたがたが神に選ばれていることを知っています。
- 5 私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いたからです。あなたがたのところで、私たちがあなたがたのためにどのように行動していたかは、あなたがたが知っているとおりで。
- 6 あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました。
- 7 その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。
- 8 主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています。そのため、私たちは何も言う必要がありません。
- 9 人々自身が私たちのことを知らせています。私たちがどのようにあなたがたに受け入れてもらったか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、
- 10 御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してください。イエスです。

(4ページへ続く)

◆ はじめに ～前回の復習

1 テサロニケ書の執筆事情

- ①パウロは第二次伝道旅行でテサロニケに寄り、伝道し教会を設立（使17：1～）
- ②迫害にあい、すぐ立ち去った後、2通の手紙を書き送る（テサロニケ第一・第二）
- ③パウロは習慣に従い、他の手紙と同様に「挨拶」から書き出す。
（そこには単に決まり文句でなく、霊的な意味合いも込められている。）

2.内容の要点

- ①携挙と再臨を体系的に扱っている。
- ②旧約の預言者たちも、メシアの来臨を預言し、イエスは再臨を約束した。
* 信者たちの間でもいつ再臨し、イスラエルは回復するのかという疑問があった。
* テサロニケ教会は、訓練期間が短く、終末論の教理に不足があった。

◆ メッセージのアウトライン紹介とゴール

| 偶像礼拝に打ち勝つ力

*このメッセージは、テサロニケ人の信仰と、生き方の変化から学ぶものである。



I 感謝の言葉と理由（2～3節）

1.感謝のことは

- (1) パウロは他の手紙と同様に、感謝をもって始めている。
 - ①テサロニケの信者のために、「いつも」神に感謝し、祈っている。
 - ②パウロの祈りは継続的であり、その源となる人々は幸いである。

2.感謝すべき理由 ～この教会が有する3つの特徴

- ①「信仰の働き」：救いは信仰と恵みによって与えられる。
*しかし、信仰は新しく変えられた行動によって表現されなければならない。
*真の信仰とは、行いの伴ったものであり、この点でテサロニケの信者たちは、正しい信仰理解を持っていた。
- ②「愛の労苦」：彼らの信仰は、神への愛、また隣人への愛となって、具体的な形を取るようになっていた。
*労苦とあるので、彼らは何等かの大きな犠牲を払って、愛を実践していた。
このような愛の実践は、神の愛に触れた者のみが実践できるもの。
- ③「望みの忍耐」：彼らが試練の中でも信仰を持ち続けることができたのは、希望があったからである。
*その希望はキリストの復活と再臨から来る希望であった。患難に打ち勝つためには、希望が不可欠である。

II より具体的な理由（4～10節）

1.パウロの確信

2022.10.9

- (1) テサロニケのクリスチャンたちは、神によって選ばれた人々である。

*その選びは、永遠の昔から定められている（エペ1:4）

- (2) パウロが確信する理由

- ①テサロニケでの伝道が「力と聖霊と強い確信」によってなされたから。
- ②これは人間的なものではなく、神の計画によるものであることを証明している。
- ③福音を聞いた彼らも、聖霊による喜びもってみことばを受け入れた。

2.変えられた人生の証し

- (1) 生きた信仰

- ①使徒たちの信仰の姿勢に影響を受け、その生き方に倣う者となった。
*速度には個人差があるが、救いを体験した人は例外なくその生き方が変わる。
*テサロニケの信者たちも同様であり、これが「生きた信仰」である
- ②その結果、彼らはマケドニアとアカヤの他の信者の模範となった。
*つまり福音を受け入れた彼ら自身が、周囲に影響を与える存在になっていた。
*パウロは新しい場所に行くと、それまでの宣教の結果を分かち合っていた。
*しかし、テサロニケ教会に関しては、それを行う必要がなかった。
- ③その理由はテサロニケの信者は、言葉と行いによってその信仰を他の地区の人々に宣べ伝えていたから。

- (2) 福音がもたらす変化

- ①テサロニケの町中には偶像が満ち、人々の心を支配していた。
*パウロがアテネに着いたとき、数多の偶像に憤った（使17：16）
- ②福音のメッセージを聞き、生けるまことの神に回心（生き方の方向転換）した。
- ③神がキリストを死者の中から蘇らせたことを（更に再臨をも）信じた。使17：3

◆まとめ：偶像礼拝に打ち勝つ力

1.テサロニケという土地

- ①タルソやアテネと同じく「自由都市」：ローマ兵は駐留せず、自治権がある。
- ②ユダヤ教の会堂は大きな力を持っていた。*神を敬う異邦人の存在
- ③偶像礼拝と、それによる道徳的墮落が蔓延した。*だからユダヤ教に憧れた。

2.彼らにとって再臨は、また偶像礼拝に打ち勝つ力である。

- ①単に教える時間がなかった（重要ではない）ので後で教えた、のではない。
- ②19世紀に英国ブレザレンによって終末論が発展し、本書が用いられた。
- ③再臨の教理を理解するために必要な、聖典（聖書）である。

3.まだ実現していなくても必ず成就するものこそ、希望とせよ。

- ①旧約時代の聖徒たちは、メシアの到来を待ち望んだ。
- ②新約の聖徒（クリスチャン）は、既にメシアが現れ、復活したことを知っている。
- ③今待っているのは、再臨（教会携挙・地上再臨）である。

4.旧約時代の聖徒よりも、はるかに優れた位置に置かれている。

2022.10.9